

私を通った幼稚園・保育園(6)

欠席の多い園児だった私

津守 房江

今から七十年前の一九三五年から約一年間を、私は下谷区立（現在の台東区）根岸幼稚園に通いました。三人の姉たちもそれぞれに一年間ずつ通ったと話していますから、当時は小学校入学前に一年間幼稚園に通うことは、私の周囲では一般的だったのでしよう。私は幼稚園には度々欠席をしましたので、胸を張って一年間通ったと言えません。むしろなぜあのように欠席が多かったのか、そんな状態で幼稚園は私にとって意味があったのか、この機会に考えてみたいと思いました。

記憶の中の幼稚園

そのころ私たち一家は東京の下町の根岸の近くに住んでいましたので、私は小さな家々の間を通り、原っぱのわきを通って一人で幼稚園に行きました。園に入る小道の奥に門があり「根岸幼稚園」の看板がかかっていました。その小道は私にとって大事なものだったようで、その小道を一人で歩きながら緊張感や「行く」という決心が強まってきました。賑やかな家から出て一人ぼっちになっても、泣いたことはありませんでした。

古い幼稚園での集合写真を見ると、先生方は着物と袴姿ですし、普段も大体和装でした。私は袴のウールの手ざわりを思い出し、着物の袂に触れた時のひんやりとした心地よさを思い出しました。それらは私の手の甲が憶えていたもので、当時私は手のひらで先生に触れたり手をつないだりした記憶はありません。

だからといって先生方が冷やかな感じがしたわけではなく、いつも子どもたちの先に立って歩くおとなでした。部屋からお遊戯室に移動するのも、先生の指示に従って行きましたが、男の子たちがこの時とばかりに走ったりするのを、ぶつかると怖いと思って先生のようにしろについていきました。日支事変の始まる前のことで、馬賊のことが語られているのを聞き、この男の子たちを連想した程、私は男の子の一団を恐れていました。

部屋では自分の席に座って、絵を描くことが多く、自由に歩き回ることもなく、静かに過ごしました。

私の違和感・戸惑い

私は五歳ごろまで、四人姉妹の末っ子として家でのんびりと暮していましたが、幼稚園では沢山の戸惑いや疑問に出会いました。一つひとつは取り上げる程もないことなのですが、七十年間も忘れずにいたことは、幼い者にとっては大事なことなのかと思ひ、心の大事箱から少し取り出してみます。

或る日、子どもたち一人ひとりに木のシャベルが渡され、砂場で遊ぶように言われました。砂場は外廊下の前の庭にありましたが、皆が一斉に入ったのでぎゅうぎゅうでした。私は普段原っぱで石や土で遊ぶことがあったので、張り切って砂を掘り始めました。ところが気が付くと「もう、おしまい」になっていました。私は自分ではほんのちよつと遊んだだけなので驚いて頭を上げて外廊下に立っている先生を見上げました。折角お山が出来かかっていたのに「本当におしまいなの」と無言のまましばらく見ていました。あの茫然としたような体の感覚は忘れません。

家では私が原っぱに遊びに行こうとすると、大抵は姉といっしょだったのですが、母は「おやつには帰きなさい」とか「夕方遅くならないうちに帰きなさい」と言いました。おとうふ屋さんのラッパの音や、空気の変化など、大まかな時間の流れの中でゆったりと遊んでいたのですが、幼稚園では細切れの時間が先生の指示によって決まるのです。

もう一つ思い出すのは、部屋で一斉に折紙を切って短冊を作った時のことです。折紙を

縦に三つに折って切るように先生は言われました。子どもたちは「三つに折って切る」ことでざわざわとしていました。先生は子どもたちの前に立ち、むこうを向いてこちらを振り返るようにしながら三つに折ることを教えて下さったのですが、私にはなかなか出来ません。紙の角と角とを合わせて二つに折り、更にそれを半分に分けると四つになってしまいました。先生は先に進んでやっているようなので、私は焦って、先生から教えられたのより少し細いけれど、四つに切ってしまいました。

この日、家に帰ってから一人で折紙をいじっていたら、いつの間にか三つに折れていました。呆気ない気持ちでしたが、私はいつのころからか「せかさないで」と言うようになります。何でも自分のペースでゆっくりやるようになりました。

私の感じた幼稚園と家庭との違和感は、子どもの時間とおとなの時間との差から出たものと思っています。

度々風邪にかかって幼稚園を欠席したわけ

幼稚園で子どもが安心出来る居場所を見つけないでいる時や、ゆったりとした時間の流れの中で遊べない時、子どもは緊張し、疲れが出てくるのでしよう。私は幼稚園の一、二学期には本当によく熱を出しました。父母は風邪を引いたのだから欠席す



るようにと言いました。大抵は微熱が出てすぐに平熱になりました。しかし父母は熱が下がっても三日は家で安静にするようにと言い、週末になるとついでに休むので一週間は欠席しました。薬のない時代でしたから当時は古い吸入器や湿布や真綿の首巻きなどが、母の用意した風邪と戦う道具でした。特別に床の中でおかゆを食べることが許されました。

こんなに大騒ぎをするのは、私の父母には子どもをなくした経験があつて、いつまでもそのことを忘れないでいたからでしょう。初めての女の子は死産で、次の男の子は一歳四か月の可愛い盛りで失つたといえます。父が北海道の寒い地で油田の技師の仕事をして、いた時のことです。子どもの死の後、暫くして仕事を止めて上京したのだそうです。子どもの命を失つたことを深く深く思い続けていたことは、私たちにもよくわかりました。

私が根岸幼稚園に通い始めたころは、父の新しい仕事が何とか軌道に乗り始めたころでした。再出発した父母の意気込みと緊張は家の中に感じられましたし、母は父を助けて家のことだけでなく、仕事もしていました。母はいつも家において、殆ど外出をしないことは、私たちの幼い時からずっと続きました。

一方、父には若い時父の兄が放蕩の末、財産を使い果たし、家が崩壊するということがありました。このままでは家族全員がだめになるといふ時、次男である父には教育を受けさせることになって東京に出てきたといえます。その後米国に留学して住み込みで働いている時、キリスト教の影響を受け、真に清潔な家庭を作りたいと願つてきたそうです。それまでの日本的「家」ではなく「家庭」が日本にも誕生し開花したところかと思えます。

私の家庭は父母の事業と子どもの養育との両輪によって成り立っていましたので、私が幼稚園に通うという姿勢にも病気から子どもを守るという姿勢にもそのころの父母の考え方があらわれていたのだと思います。

幼稚園で私の心身の緊張がゆるんだ時 —— おもらし事件 ——

二学期の終わりか、三学期の始めごろのことだったのででしょうか。寒い日が続き、子どもたちの手足に霜焼けができていました。当時は暖房も少なかったもので、幼稚園で霜焼けのひどい子には手当てをして下さるようになりました。手当てといっても、熱いお湯につけてよく揉んで、あとで油薬をつけて下さるのです。私も霜焼けがひどかったもので、別の部屋で数人の子ともと並んで待っていました。私は列の一番うしろにいましたが、自分の順番になって、手を白い洗面器のお湯につけてゆっくり揉み始めた時、知らない間におしっこが出ていました。

それまで私は幼稚園のお便所（当時トイレという言葉は勿論、お手洗いという言葉も使いませんでした）に行った記憶はあまりありませんでした。大抵家に帰るまでは我慢出来ませんでしたし、おもらしをしたことがなかったもので、何が起ったのかわからない位でした。私の下に来た水溜まりに先生が気付き、小使いさんのおばさんが来て、小使い室に連れていってくれました。下着を取りかえたことの記憶がないのに小使い室の温かさは今も憶えています。土間ではお湯が沸いていて、畳の部屋では小使いさんのおじさんが煙草をキセ

ルで一服して、普通の家のような雰囲気がありました。

皆といっしょに帰る時、例の門の所に小使いさんのおばさんが立っていて、私に小さな包を渡しながら「はい、おみやげ」と言いました。それまで私は濡らした下着のことを忘れていましたが、その包の中に入っているのだとわかりました。いっしょに門から出て来た友だちが、「なあに？」とたずねた時、おばさんに言われた通り「おみやげ」と答えました。友だちもそれで納得したようで、小さな包を持った私と二人で帰りました。家で母にも「おみやげ」と言つて渡した時、母も何も言わずに受け取つたように思います。

私が初めておもらしをしたことは、今考えると、私の心身の緊張がゆるんだ証のように感じられます。後にも先にもないおもらし事件は、こうして私にそれまで見えなかつたことを見せてくれました。あの怖かつた男の子の一団も、そんなに強くはなくて、一人ひとり違つた名前があることがわかりました。

小学校へ行く前の一年足らずの幼稚園で、私は人の中でもそう緊張しないで過ごすことが出来るようになっていました。姉たちではない自分の友だちが出来始めたのも、このころです。

幼児期の春の霞のような生活に少しずつ輪郭が出来、外側の秩序とも出会えるようになってきました。現代の子どもに比べると、何と長い間、霞の中を生きることが出来たことかと思えます。

(保育研究者)